

博士学位申請論文審査報告書

■論文題目

『新疆ウイグル自治区におけるウイグル族の言語と宗教を核とした文化継承と維持 —ウイグル族の教育状況を手がかりとして』

■学位申請者： 18RD507 アイネル・バラティ氏

■指導教授： 片山 隆裕教授

1. 経過報告

アイネル・バラティ氏の学位申請論文は、2017年2月25日に開催された国際文化研究科事前審査委員会において博士論文審査の対象として承認され、主査金縄初美、副査の片山隆裕教授（指導教授）、中島和男教授3名による審査委員会がアイネル・バラティ氏の博士学位申請論文の事前審査を行うこととなった。

審査委員会は、全3回（2017年6月30日、9月2日、10月31日）の審議の中で、論文構成と内容、誤字脱字、及びアンケートの適切な運用などを中心に論文指導を行い、再提出を要求した。

2017年11月17日に提出された論文はこれまでの指導が十分反映されており、審査委員会はアイネル・バラティ氏の博士学位請求論文の提出を認めた。2018年1月31日、新谷秀明大学院国際文化研究科長、審査委員3名（主査金縄初美、副査片山隆裕、副査中島和男）ほか立ち合いのもと最終審査委員会（公開口述試問）が実施され、審査委員による総評と質疑応答を行った。

2. 審査報告

アイネル・バラティ氏の『新疆ウイグル自治区におけるウイグル族の言語と宗教を核とした文化継承と維持—ウイグル族の教育状況を手がかりとして』は全8章の構成となっている。

1978年以降、中国において実施された改革開放政策により、80年代の後半から中国経済が著しく発展した。経済発展に伴って各地域で人口の移動が顕著になり、新疆ウイグル自治区における漢民族人口が増加し、漢語の必要性が高まった。このような背景のもと、少数民族に対する漢語教育が強化され、「双語教育」とよばれる少数民族地区における言語教育政策が徹底的に実行された。

新疆ウイグル自治区の主要民族であるウイグル族は、母語であるウイグル語を使用し、イスラーム教を信仰し、イスラーム文化を有するトルコ系民族である。「双語教育」の実施によってウイグル族の漢語能力が上がり、漢語による文化交流も可能となったことによって文化接触が起こり、ウイグル族の伝統文化の変容過程における漢文化の影響が目立つようになった。近年では、漢語を習得して経済的豊かさを追求する一方、ウイグル族の知識人の間では、民族伝統文化の継承と維持についても関心が集まっている。

本論文における研究目的は、ウイグル族が漢語を学ぶことで漢民族との交流が深まり、ウイグル文化が漢文化の影響を受けていると考えられている状況の中で、具体的にはどの分野で、どのように影響を受け、ウイグル文化はどのように変容しているのか、あるいは文化がどのように維持されているのかということについて、言語と宗教の側面から具体的に解明することにある。よってアイネル氏は、本論文において、ウイグル族の例を通して、現代中国における少数民族の教育状況を具体的に調査し、教育が伝統文化の継承と維持にどのような影響を与えるのかを考察した。

以下、章を追って検討する。

序章

アイネル・バラティ氏(以下、「筆者」とする)は、本論文の研究動機について、藤山正二郎「ウイグル語の危機」(新免康編 1999 勉誠出版)における子供たちが漢語を習得することでウイグル語の使用が減ることになり、ウイグル語が消滅する危機に面しているのではないかという提起と筆者自身の漢語学習と漢語使用における経験をもとに、「子供たちの言語使用状況に注意するようになり、漢語学習とウイグル語の使用状況との関連性を考えるようになった」と述べている。さらに、現地調査を通じて、漢語学習がウイグル族の言語使用状況に大きな影響を与えていると同時に、ウイグルの伝統文化の継承と維持についても大きな影響を与えていることに気づき、日本の文化人類学、教育学などの分野に関する先行研究を踏まえ、参与観察の方法と調査に関する研究を参考にし、言語学習後の文化変容、特に言語文化と宗教文化の変容についての独自の研究を行う必要があるという研究目的を提示している。

先行研究については、「双語教育」に関する先行研究、宗教に関する先行研究、文化人類学、教育と言語文化、教育と宗教文化に関するものに分けて明記され、言語的にも日本語、中国語、ウイグル語の文献が参照されている。

第1章 新疆ウイグル自治区と調査地の概要

本章では、本論文の調査地である新疆ウイグル自治区は、ウイグル族、漢族、カザフ族などの多民族が生活している地域であり、古くから多言語や多宗教が存在したため、言語文化や宗教文化が複雑であること、ウイグル族がアルタイ語族東トルコ語系に属するウイグル語を使用し、イスラーム教のスニ派のムスリムであることを述べた。さらに、ウイグル族がイスラームを信仰するようになった後、アラビア語、ペルシア語から多くの語彙が借用され、現在もその影響がみられること、近年は漢語から多くの語彙借用がみられることにより、ウイグル族独特の言語文化が存在すると同時に、イスラーム教を規範とした宗教文化が存在することを明らかにした。第2節では、筆者がフィールドワークをおこった新疆南部に位置するコルラ市の地理的状況と民族構成、3節ではウイグル族の生活形態を述べ、第2章以降の論を展開するための基礎的内容を整理している。

第2章 中国の少数民族政策と少数民族教育政策

第1節では、1949年の中華人民共和国成立以後、中国の民族平等、民族団結が提唱され、1952年各少数民族地域において、「中華人民共和国の民族区域自治法」を施行することが定められ、それに基づく各法律が定められたことを述べた。

第2節では、各少数民族の人材育成を目指して、「少数民族教育政策」が実施され、普通語(標準語)の普及を少数民族地域で積極的に進める「共通語採用措置」、文字を持たない民族に対して文字を考案し、文字を有する民族語に対して文字改革をおこなう「文字改革運動」、及び少数民族に対して民族語と漢語の2言語教育を実施する「2言語併用教育政策」が実施された。その中でも中国少数民族の言語政策の特徴としてあげられるのは「双語教育」政策であるとしている。

第3節では、民族教育状況を1)民族言語文字の大発展期(1949年から1958年)、2)民族言語文字の破壊時期(1958年から1978年)、3)民族言語文字の回復・発展の新時代(1979年以降)と3時期に区分して整理した。

まとめとして、1980年代以降から「2言語併用教育政策」が強化され、また「改革開放にともなって、中国の各少数民族の言語や文字が復活し、言語文化の保持、少数民族のアイデンティティの維持を保護する『憲法』や『民族区域自治法』を実施する旗を掲げながらも、『2言語教育政策』を実施することで、国民国家へ統合させる政策も同時に推進した」と述べている。

第3章 新疆ウイグル自治区における「双語教育」

本章では、本論文の調査地であるコルラ市の主な教育状況、特に「双語教育」が実施された後、各学校の教育状況がどのように変化したかのことについて述べた。具体的には「双語教育」状況について、事例を挙げながら幼稚園から大学までの学校における「双語教育」状況と家庭における状況について考察を行った。その結果、子供の進学と漢語教育の選択は親の考えに基づくことが多く、親が自分の生活体験をもとに、子供の学校教育を決める傾向があることが分かった。さらに、2000年9月から「双語教育」政策の拡大として、漢民族地域に「新疆高校クラス」が設置された。筆者は深圳の「新疆高校クラス」を調査対象とし、アンケート調査とインタビュー調査を行い、その結果、生徒は自分が「新疆高校クラス」に合格できたことを誇りに思っており、漢語を習得できたことは自分にとってプラスであり、これを武器に勉強や仕事の面において十分に活用できると考えていることを理解した。また「これらの言語教育政策の結果はある部分、民族融和の促進に役立っているようである。だが、文化の維持と教育との関連を考えたときに、彼らが漢文化の影響を大いに受けることは民族アイデンティティの維持には不利な要因となる反面、自分が漢民族と異なる言語を持っているウイグル族であることに改めて気づくことによって、異文化の中から民族文化を振り返ることができ、民族アイデンティティに対する意識が高まったとも考えられる」と述べている。

第1節、第2節では学校教育に関する事例を取り上げ、第3節では家庭の中での言語使用状況を取り上げ、総合的観点から「双語教育」を分析している。その結果、学校教育と家庭教育の状況を総括し、学校教育における言語教育は親の意思のもと子供の将来を考慮して選択され、結果的に漢語教育に比重が置

かれる結果となっている。一方で家庭内では母語の必要性を教えるなど、母語の維持への努力がみられることを明らかにした。

第4章 新疆ウイグル自治区におけるウイグル族の言語文化の継承と維持

ウイグル族の主要使用言語が漢語へと変化した今日の状況のもと、本章では、ウイグル族が漢語学習をすすめるなか、母語のウイグル族に対してどのような意識を持っているのか、その言語意識と実際の言語使用状況はどのような関連があるのかを明らかにし、多民族国家の少数民族地域における少数派の言語意識と言語使用状況について考察をおこなった。

コルラ市で行ったアンケート調査とインタビュー調査を検討し、現地で生活しているウイグル族の言語使用意識と言語使用状況に関連する調査を行った。調査結果から漢語学習の進行により、ウイグル族、特に大人たちの間で、母語の重要性と継続に対する意識が比較的高い反面、子供たちの母語使用への意識は低いものであった。

調査結果の分析と考察から、ウイグル族の母語を大切にするという言語意識と、ウイグル語の実際の使用状況との間にずれが存在しており、中国政府が実施している「双語教育」政策が結果を出し、ウイグル族の言語文化の継承と維持は困難に直面していると言えるだろうとまとめている。

第5章 ウイグル族における宗教(イスラーム教)の文化の受容

本章では、まず新疆におけるイスラームの受容について、他宗教の受容も包括しながら時間を追って整理した。次に現在のウイグル族の言語文字と日常生活用語、祭りや各種儀式、生活習慣とタブーなどの面におけるイスラーム教の影響をまとめ、「ウイグル族の人々にとって、イスラーム教は信仰と礼儀を支える宗教的原理の体系であると同時に、民族の伝統と集団的アイデンティティを構築する文化装置であり、民族知識を伝達する教育体系であると考えられる」と述べていることから分かるように、イスラーム教がウイグル文化の核となりえるほど浸透していることが示された。最後に、10世紀から現代にいたるまでのウイグル族の文化受容とイスラーム教について、受容時期と受容形態をもとに、積極的受容、強制的受容、自然的受容の3つの区分から考察している。

第6章 新疆ウイグル自治区におけるウイグル族の宗教文化の継承と維持

ウイグル族における宗教文化は学校教育、親からの家庭教育と各儀式を通して継承、維持されてきた。中華人民共和国の建国までは宗教教育が中心となり家庭の中、モスクなどで設置されたコーラン学校を利用して行われていた。後に、新式学校教育が始まってからも学校教育の中で宗教教育が行われてイスラーム教の教義が次世代に伝えられてきた。中華人民共和国建国後、学校教育と宗教教育が分離されたことで、一部のモスク、または宗教聖職者の家で宗教教育を受け、宗教文化が継承されてきた。しかし、1960年から徐々に宗教教育が全面的に禁止され、目に見える形で宗教教育を行うことが不可能となった。具体的には文化大革命以前、以後に分けて分析している。

筆者は調査地のコルラ市近くに位置している農村と町のウイグル族家庭の例を挙げながら彼らの一日の生活を分析し、宗教的儀式を行うことで教える側に立つ者は、政府の許可に得て自らの村の宗教活動に参加している。そして婚姻や葬儀という通過儀礼の場所を利用して、自らの実践を通して、イスラーム教の教義を次世代に伝えていること。一方で教えられる側は宗教的儀式に参加して宗教文化を学ぶ機会が徐々に減り、イスラームの教義を学ぶ場所は家庭だけに留まり、宗教文化を習得する唯一の方法は親から学ぶことになっていることを明らかにした。

次に、宗教文化の継承と維持に関するアンケート、宗教信仰の度合いに関するアンケートを実施し、多くのウイグル族は伝統文化の維持においても宗教信仰の影響が極めて重要だと考えているが、宗教教育が制限されていることで、宗教文化の継承と維持も言語文化と同じように困難に直面しているといえると提示した。しかし、イスラーム教を信仰するウイグル族の言語文化と宗教文化は世代間によって差がみられ、今後、ウイグル族の民族伝統文化の継承と維持は徐々に新しい文化変容、漢文化への同化に迫られていくことになるだろうと指摘している。

終章 まとめと今後の展望

第1節で論文全体を各章ごとにまとめ、第2節で今後の課題として、イスラーム教を信仰する他の中国少数民族の言語使用状況との比較を行うこと、ウイグル族の宗教にとどまらず、家族構造、ジェンダーといった視点からもウイグル族の文化変容を引き続き研究していくとした。

以上の通り、アイネル氏は新疆ウイグル族におけるウイグル族の言語と宗教に関して、大量の文献資料を収集し、自身のフィールドワークとアンケート調査に基づいて本研究をまとめあげた。本研究にはこれまでのウイグル族の言語使用状況と言語教育にはみられない独自の視点とアプローチがみられる。それを可能にしたのは、ウイグル語、中国語、日本語による幅広い参考文献を渉猟したこと、ウイグル語と中国語によるアンケートを実施できる堪能な語学能力を有していることがある。さらに、文化継承と維持について、言語と宗教を関連付けながら詳細な分析を行った点は、アイネル氏の精力的な研究活動がみてとれ、言語教育研究とエスニシティ研究の両面において非常に価値が高い。

また、本論文で述べられているウイグル族の言語政策と文化継承の問題については、中国全体の言語教育と文化継承の普遍的課題に対しても裨益することとなるであろう。

以上、総合的に判断して、本論文が博士学位を授与するに値する研究であることを、審査員一同承認した。

2018年2月24日

博士論文審査委員会

主査 金縄初美

副査 片山隆裕

副査 中島和男